

特集 能登の今 —令和 6 年能登半島地震による農林水産業の被害と復興への展望—

能登観光再興の一助に
日本一非効率な千枚田で米づくり白米千枚田愛耕会
山下博之

白米千枚田（以下「千枚田」という）は、日本海に接し、小さな田んぼが階段状にせり上がっている棚田で、輪島市を代表する観光資源となっています。

「田植えしたのが 999 枚、あとの一枚、藁の下」と歌われるほどの小さな田んぼがあり、実際に新聞紙 1 ページほどの田んぼが何枚かあります。平成 13 年に国指定文化財名勝に指定され、このとき総面積 4 ha、枚数にして 1,004 枚が確認されています。取れるお米の総収穫量は約 6 t ぐらいです。



千枚田の米づくりの主な作業ですが、春の荒起こし、代かき、畦塗り、杵転がし、田植え、夏の草取り、秋の稲刈り、ハザ掛け、脱穀、粃摺り、そして年間 6~7 回行う草刈り、ほぼ毎日の水管理。他にもまだありますが、機械といえば小さな耕運機テラーと草刈機、自走式脱穀機ぐらいで、いずれも大変な労力と時間がかかる昔ながらの人手作業で米づくりをしています。

地震前の状況は、小さな棚田は機械化を図れず大変な労力と時間を要し、地元農家の高齢化もあって、耕作放棄は進み、田んぼを借りて耕作していた団体が撤退を表明したことを機に、平成 19 年、白米千枚田オーナー制度（以下「オーナー制度」という）を導入することとなりました。このオーナー制度の導入により、耕作放棄地の耕作が続けられ、良好な景観を維持できる体制が整いました。

そして平成 23 年には、「佐渡のトキ」と同時に「能登の里山里海」が日本で初めて世界農

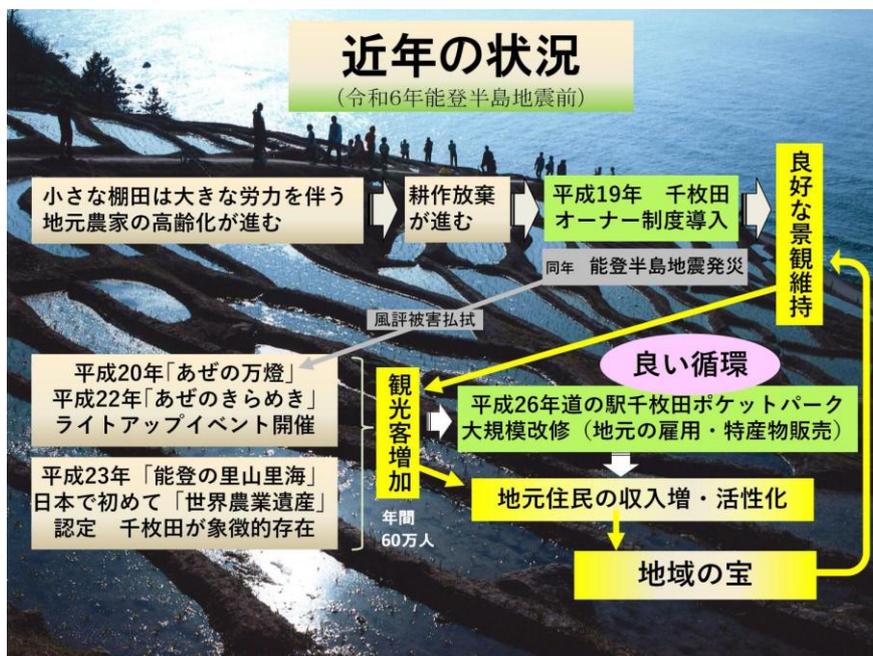
業遺産に認定され、千枚田はその象徴として頻繁に取り上げられたこともあり、人気が高まり、観光客が顕著に増加したため、平成 26 年には手狭だった「道の駅 千枚田ポケットパーク」の大規模改修が行われ、地元住民の雇用と、地域特産物を販売できるようになり、地元の収入増と活性化につながったことから、千枚田が徐々に「地域の宝」になってきたような気がします。

こうして、地元として千枚田の景観を良い状態に保つ意識が高まり、景観が良くなれば、観光客が更に増え、地元住民の収入増につながるという、千枚田にとっても、地元住民にとっても、良い循環が回り始めていました。

平成 19 年に輪島市が開始したオーナー制度ですが、年会費 3 万円で、好きな田んぼを 1 枚選び、作業は都合の良いとき参加いただくもので、特典は米 10 kg となっています。

ちなみに令和 5 年の千枚田耕作枚数の内訳は、オーナー制度で 553 枚、市役所 147 枚、地元 JA 121 枚、地元山菜組合 20 枚、個人は 3 名で併せて 163 枚となっています。

オーナー会員は、殆ど遠方の方ですので、オーナー田を替わって耕作管理する団体として、白米千枚田愛耕会（以下「愛耕会」という）が結成されました。メンバーの殆どは定年退職した地元農業経験者で、名簿上は 30 名ほどですが、実際の作業参加は 5 名から多くても 12 名ほどで、高齢化が大きな課題となっています。



平成 19 年能登半島地震の風評被害払拭のため、千枚田の畔に 3 万個のキャンドルを並べた一晚限りの「千枚田あぜの^{あかり}万燈」を開催しました。きれいで幻想的な光景は好評でした。ロングランの開催が望まれて、キャンドルから太陽光発電の自動点灯 LED に替えた「あぜのきらめき」を毎年 10 月中旬から翌年 3 月中旬まで開催し、能登観光にとって冬場の良い誘客イベントとして定着しました。



以上のように、令和6年能登半島地震前までは、千枚田にとっても、地元住民にとっても、「良い循環」が回り始めていて、観光客もようやくコロナ禍前に戻ると期待をしていたところでした。

2024年1月1日に令和6年能登半島地震（以下「地震」という）が発災し、輪島市含め能登半島は甚大な被害を受け、千枚田も大きなダメージを受けました。千枚田を取り巻く「良い循環」も打ち砕かれてしまいました。

地震後、千枚田では、いたるところに大小無数の亀裂と土砂崩れを確認しました。

修復は、地震当初、市役所では当然、市民の被災対策が優先で、千枚田どころではありませんでした。ただ、愛耕会としては千枚田を早くに修復したいという思いから、その財源確保のため2月にクラウドファンディングを立ち上げました（目標額1千万円→18千万円のご寄附をいただいております）。

同年3月に千枚田復旧のため国・県・市の打合せがあり、愛耕会も参加することができ、愛耕会の要望に対しまして真摯にご対応をいただいていることに感謝している次第です。



修復は、国の災害復旧事業として決定され、重機を使う大きな被害箇所は請負業者が直接施工し、人力で修復できる場所は愛耕会が請負業者の下で、次の米づくりを考えながら施工するという棲み分けをしました。

いざ、修復に入ると新たな被害を確認することになります。それは、地表に出ていない無数の亀裂、耕作面の傾斜（不均平）、沼地化した田んぼなどの被害です。

修復作業ですが、亀裂はまず土壌改良剤の粉を入れ、更に土をかぶせるように入れてから掛矢で叩いて締めます。崩れた畔は盛り直し、傾斜がひどければ中に畦を作って水平にしやすくしていきます。

次に、地表に出ていない亀裂も無数にあることから出来るだけ深く荒起こしをして、水を入れ、ドロドロにした泥で亀裂に目詰まりを起こすようにします。そして、高低差の修復には均平となるよう土を動かします。それから田植え前のように畦を塗り、保水できる田んぼに戻ったかを確認して修復完了としています。



一部のエリアの修復を終えたところで、同年 9 月 21 日に能登豪雨が発災し、再度、輪島市含め能登半島は甚大な被害を受け、白米千枚田も再度、大きなダメージを受けました。

千枚田では、大小 10 か所以上の崩壊があり、苦勞して地震の修復を終えたエリアも崩壊して、愛耕会メンバーもさすがに当時は心が折れてしまいました。

千枚田から 2 km ほど山の上にある用水と取水口もかなりの被害を受けたため、田んぼの修復に必要な水を引くことができなくなり、修復作業は大きく遅延して、現在、まだ完了目途がたたない状況にあります。



写真提供: 農林水産省北陸農政局

修復は諦めませんが、地震によって新たな課題が生じています。それは愛耕会メンバーの多くは、自宅が被災して金沢方面に避難し、地元の仮設住宅に戻られた方もいますが、そのまま戻ってこられない方もいます。メンバー募集に努めていますが、千枚田における作業の大変さを知ってか、なかなか応募はありません。また、田んぼを借りて耕作していた団体が地震を機会に撤退することが予想されており、その撤退後の田んぼを担えるのは、現状では愛耕会以外にないと考えられますので、修復後、愛耕会が担う田んぼが相当数増える見込みとなります。そうすると、以前からの高齢化と相まって、マンパワー不足の課題がかなり深刻になりそうです。

そんな千枚田ですが、新たな取組みを始めることになりました。

それは、地震直後から能登半島に入り、多くの支援活動・義援金活動をされている台湾の慈善団体「慈濟」(台湾佛教慈濟慈善事業基金會)が、支援活動の一環として、愛耕会に農業者の収入増につながる農業カーボンプレジット事業の参加について、費用面も含め、全面的に支援していただけることになり、2025年より参加することとなりました。

自然と共生している農業者として、地球温暖化排出ガスの抑制に向けた活動は大事であり、効果が小さくても行動を起こす大切さの情報発信に繋がれば幸いです。温暖化抑制の活動として、有機農法への転換を予定しています。

また、修復できたあと、かなり厳しくなるであろう千枚田の米づくりを考えていたところ、千枚田は、日本で恐らく平均面積が一番小さい棚田で、昔ながらの大変な労力と時間を要する人手作業



の米づくりをしています。このことは「日本一非効率な米づくり」をしているのではないかと、また、先人の知恵と工夫された人手作業は現在では技術遺産のようで、それを守り続けていることは、価値のある活動をしているのではないかと思ひ始めています。

愛耕会としても「日本一」が付くと何か誇らしく、決して楽ではありませんがスローライフ的な仕事に自負を持って、また頑張れるような気がしています。

最後になりますが、地震で能登の大きな観光資源であった「輪島朝市通り」が全て焼失してしまい、再開にはまだ相当な年数がかかると思われます。当市および能登の復興を考えたとき、千枚田の持つ役割が大きくなっていると存じます。

愛耕会としては、豪雨災害で修復意欲が一旦、くじけはしましたが、今は「地域の宝・千枚田」を守るという意志がありますので、白米千枚田が能登観光の一助となるよう、まずは修復に努め、「日本一非効率な米づくり」ですが、頑張ることで道が拓けていくと信じます。

いつか元の綺麗な白米千枚田に戻ると信じています。

